

JAC創立100周年記念国内登山(中央分水嶺踏査)の山行報告書

(1)~(8)は必ず記入してください。(9)~(11)は、気づいた事項があれば記入してください。

(1) 担当支部:	東九州支部	(2) 記載者氏名:	飯田勝之	会員番号:	10912	事務局整理記入欄	東九州 - 14
分水嶺区分	日出生台演習場内(819m地点~K065~兜山山麓車道)		(3) 山行日:	2004年	11月	26日	(4) 天候

(5) 参加者氏名および会員番号

サポート要員氏名および会員番号

三浦敬志	8180	佐藤秀二	13141	高橋隊員	陸上自衛隊		
大林正彦	8758	中野 稔	13997				
加藤英彦	8765	安部可人	会友				
飯田勝之	10912	遠江洋子	会友				
高橋康利	11305	米田孝士	陸上自衛隊				
西 あずさ	12347						
計			11名	計			1名

(6) 山行記録・位置確認(出発点・ピーク・峠・到達点など、主要ポイントに関して)・所要時間・道の状況

コース概略:	黒岳山麓の県道脇の日出生台演習場の境界地点から演習場内を兜山山麓まで												
アプローチ:	踏査開始地点は県道沿いで、終了地点は演習場内であるため、車は場外に置き、高橋隊員が会員のドライバーを送迎												
地点コード	地点名	2.5万分の1 地形図名	経度E			緯度N			高度 m	到着 時刻	出発 時刻	道の 状況	(8)~(11)の特記 事項等との関係
			度	分	秒	度	分	秒					
歩行開始点 29	黒岳山麓 標高点750m	豊後森	131	13	44.2	33	19	11.8	751		7:30	B-3	
分水嶺到達点 30	標高点891mの南	豊後森	131	13	23.4	33	18	46.1	803	7:45		B-1	(1)
31	822mの東 ひめの台	豊後森	131	13	37.4	33	18	28.7	824	8:07		B-1	
32	標高点808m	豊後森	131	14	0.7	33	18	41.5	808	8:18	8:20	B-1	
33	標高点799m	豊後森	131	14	22.2	33	18	39.3	798	8:40	8:55	B-1	(2) 写真1
34	標高点666mの北方	日出生台	131	14	59.9	33	18	47.7	741	9:50		B-1	写真2
35	標高点710m	日出生台	131	15	33.1	33	18	45.5	718	10:25		B-1	
36	標高点718m	日出生台	131	15	55.3	33	18	57.5	721	10:50		B-1	
37	標高点662mの西方・丸山	日出生台	131	15	57.5	33	18	35.4	699	11:08	11:18	B-1	
38(K065)	標高点690mの南西、釜石台	日出生台	131	16	26.6	33	18	15.8	699	11:38	12:30	B-1	(3)
	678m	日出生台	131	16	56.0	33	18	2.6	683	12:53		B-1	
分水嶺離別点	兜山山麓の車道												
歩行終了点	兜山山麓の車道	日出生台	131	17	43.9	33	17	50.7	783	13:50		B-1	
総歩行時間(休憩時間を除く):											5時間00分		

(7) 三角点の位置と保存状況

上記(6)の地点コードを 記入してください	点名	等級	方位	保存 状況	特記事項
					区間中に三角点はなし

(8) 人工施設の現況および地形図との相違点

(1) 演習場内には地図にある道路のほか、小さな道路が随所に見受けられる。地図上の道路も全て砂利道である。
(2) 799m地点には巨大な古いコンクリートの固まりで、昔の陸軍の砲撃の指揮、見張り台の跡がある
(3) 釜石台には大きな塹壕が造られていて、中から遠くの着弾地点を監視できるようになっている。

(9) 水および植生に関連した特記事項

分水嶺上ではないが、踏査地域の近くには「高陣力尾自然環境保全地域」の小湿原がある。ここは植生を保全するために立ち入り禁止とするとともに、演習等にも使用しないことを自衛隊と大分県が協定を結んだ所である。
--

(10) その他の特記事項

--

(11) 写真の添付:(有りの場合には、写真説明を記入してください)

写真説明:
(写真1) 標高点799mの旧陸軍の建造物の前で
(写真2) 標高点710m付近より弾着地方面

山行報告書(続き)

表面(1ページ目)に書ききれなかった事項を記入してください。

<p>車6台に分乗した今日の参加者は、早朝6時15分に駐屯地宿営所前で合流した、由布院駐屯地の広報室長米田2等陸尉とジープの運転手高橋隊員の案内で現地へ向かう。演習場入り口の駐車場に3台を置き、残りの3台に全員が乗って踏査開始地点へ向かい、ここで全員を降ろした後、3台の運転手はジープの先導で車を入り口駐車場に運び、その3人はジープに乗せてもらって演習場内を先回りして、出発地点から分水嶺を踏査してくる踏査隊と合流する。これはすべて米田広報室長の計画によるものだ。</p>
<p>黒岳との鞍部を通過する県道から演習場敷地内に入った踏査隊は早速のヤブこぎである。先頭に行くのは今日一日我々に同行する米田室長である。演習場入り口の緩いピークを登り越してコンタ800mの丘の上に立つと、後ろに黒岳が聳えているほか、見渡す限り広い草原の演習場である。これから目指す兜山は東方遙か彼方の草原の果てに、朝靄にかすんでいる。ルートは目指す兜山とは反対に西に進んでいく。のポイント地点819mは分水嶺から外れており、現地の分水嶺はポイントの約300m南方の低いところを緩くアップダウンしている。</p>
<p>この日と明日と続けて二日間、それも週末に演習場内を踏査できるのは、環境整備4月と11月に限って一定期間演習を中止し、場内の環境整備を行うことに定められた期間だからであるとのこと。隊員が路盤の整備や路肩の草刈り作業等に精を出しているそばの車道を横切り、演習場内の分水嶺の最西端の丘から南下していく。再度車道を横切って「ひめの台」と名付けられた丘から緩く東にカーブしながら草原の丘を下り、そして上り、南側の車道度横切り丘を登り詰めたところが小ピークで、のポイント822mの標高点は100mほど西方の丘の上にあり分水嶺から外れている。</p>
<p>北側になった車道に再び近づき、ここから500mほど車道に沿って分水嶺はほぼ平坦に走っており、再び車道を渡って北側の稜線へ登ると、ここがのポイント808mの標高点で、ここまでが歩き始めて約40分である。再び緩く下っていき、南にほぼ直角に曲がりながら車道を横切って、反対側の稜線に登っていき、そこから東に曲がって広い草原の緩いアップダウンを500mほどでなかなか小高いピークに登りつく。</p>
<p>のポイント799mの標高点で、その頂には遠くから岩のようなものが見えていたが、到着してみると巨大な古いコンクリートの固まりで、昔の陸軍の砲撃の指揮、見張り台の跡とのことである。ここまで歩き始めて約1時間である。ここで小休止とする。このピークから東側は150m近く低い草原台地となっており、遠く広く続く演習場の草原が、縦横に波打ちながら広がり、遠くかすむ福万山の麓まで続いている。目指す兜山は、福万山の山体に包まれた感じでまだかなり遠くに見えている。先ほどまで絶えず左に見えて、少しも離れない感じであった黒岳が少し後方になった感じである。</p>
<p>このピークから分水嶺はほぼ直角に北に曲がりながら高度を下げながら、車道を横切り、ゆっくり東に曲がっている。その東に曲がりかけた稜線はそのままさらに突き上げて、前方に大きな岩峰を見せているのが766mの「ザクロ山」と名付けられたピークである。このピークは北側直下を通る県道から見ると、まるで西部劇映画で見るモニュメントヴァレーの岩山のように、山をやる人間なら誰もが一度は立ってみたいと思う頂きである。</p>
<p>しかし演習場の柵で仕切られた中のそこには一般人は誰も登れない。分水嶺から外れているがそこに登りたいと希望すると、米田室長は快く案内してくれた。ザクロ山の頂上は北から東にかけては数十メートルの断崖絶壁で、演習場はおろか、日出生台全体から遠く由布岳、鶴見岳や宇佐の山並みまで見晴らせる。</p>
<p>ザクロ山から引き替えて、分水嶺上の丸い稜線を緩く下り、細い車道を横切りその前方の斜面を登り返していくと、柵で仕切られた平らな稜線の上に登りつく。その柵の向こう側は弾着地とのことで、ここで米田室長から「浮き石を蹴ったり、地上に出ている古い信管等には触らないように…」等、これから先の歩行上の注意を受ける。見るとむき出しになった赤い土の上には砲弾の破片が無数に散らばっている。このように弾着地外にも破片が飛んでくることは多いとのことである。</p>
<p>のポイント地点、666mは分水嶺から離れた南方約1kmの所にあり、弾着地の中だ。広い台地状の稜線を、緩く右左と蛇行しながら東に進んで行くうちに「一休みが欲しい」との声が聞こえてくる。先導する米田室長は早足で、朝の出発時に「私は早足なので、早すぎたら言ってください」と言われていたが、全員ほぼ隊列で進行してきた。しかし、やっぱり早足であることは皆感じていたのである。</p>
<p>時刻は10時少し過ぎ。先導する米田室長に言って、北風の当たらない日当たりのよい草原で小休止とする。休憩中にも米田室長から演習に関する色々な話があり、また支部員から色々な質問も飛び出して、まさに基地見学会の様相である。</p>
<p>15分ほど休憩して再出発。南西方向に小高いピークの丸山とその向こうに釜石台とが見える。あのあたりで昼食にしようということになって、全員再び気合いを入れる。</p>
<p>のポイント710mの標高点から緩く下ると分水嶺は直角に北に曲がって下っていく。滑りやすい土のむき出しの急斜面を下り、車道に出るとそのあたりから分水嶺は甚だ不鮮明である。右手の低い谷の向こうには湿原丈の窪地があるが、その窪地のどちら側が高いかが不明確なのである。南側ならそのまま車道を進めばよいが、北側ならその北側に大きく迂回した稜線をたどる必要があるのである。米田室長が一足先に斥候に立つ。そして結果は北回りである。</p>
<p>車道を横切り、北側の急な斜面を登りつめると、その向こうにもう一つの高い稜線が続いている。北向きから東向きへと曲がりながら、クヌギの幼木丁寧に植林された茅の斜面を登ると平らな広い稜線で、500mほど行くと今度は南向きに方向を変えながら下り始める。その下り始めるところに三角測量の測量塔のような三角形の木製の柱が立っている。36番のポイントの718mの標高点であるが、この工作物は自衛隊が測量のために設置したものだそうである。この塔はこれまでも点々と見られたし、これから後にも再三見受けられた。</p>
<p>測量塔から草の斜面を下っていくと車道の三叉路に降りついた。右に分かれる車道は湿原状の低地を埋め立てて目の丘の方へと上っている。地図の上でも現場の状況を見ても、長く湾曲したこの湿原の原全体が分水嶺のようだが、現状はこの道路が東西駅館川と玖珠川とに水を分けている。道路脇のガードレールを3人の隊員が濡れた布と噴水車とで洗っているそばを通過して、車道から右に分岐する、荒れた小さな車道伝いに稜線を上っていくと、丸い大きな丘の上に達した。ここが丸山で、のポイントの662mの丘は数百mほど東に見え、分水嶺から逸れている。丸山の頂上にあるパンダマストの電柱には砲弾の破片が当たった跡と見られる、幅3.4cm、長さ十数cmの炸裂傷が残っている。</p>
<p>丸山から東に緩く下り、車道沿いに草の稜線を進む。道ばたの電柱に登って、てっぺんに黄色の塗料を塗っている数名の隊員の姿を見ながら東進し、道の北側の小ピークを拾いながら緩く南方にカーブしつつ、車道を横切って前方の丘へと登っていく。緩く回り込みながら登りついた頂は標高700mで、このあたりでは一番高く、釜石台と名付けられているところだ。38番のポイントである690mは分水嶺から逸れた200mほど北にある。釜石台の頂上には土の中に大きな壟壕が造られていて、狭い入り口を入ると中は薄暗く、西向きに縦幅20cm、長さ7.8mの窓があるだけである。覗いてみると西方の丘陵や弾着地点がパノラマに見える。</p>
<p>このピーク到着が11時38分である。風を避けて南斜面の日だまりで昼食休憩とした。予定していた今日の踏査終了地点の車道はもう目前に見える。当初見込んでいた時刻より早いペースで踏査が進んでいるのである。暖かな日だまりでゆっくりと休憩し、約</p>

山行報告書(続き)

(1・2ページ目)に書ききれなかった事項を記入してください。

一時間の後、12時30分に再び出発する。

緩い斜面の草原を南下し、704.3mの三角点のある小高い丘を100mほど西に見ながら緩く東方向にカーブしていく。ほとんど平坦な草原を米田室長はどンドン早足で歩いていく。ビールで心地よく、弁当で満腹のおなかには少し手応えのあり過ぎる行軍である。

車道の脇にある678m標高点を12時50分に通過する。この地点が当初予定していた本日の踏査終了地点だが、時刻もまだ早いので、兜山の麓まで進むことにした。この付近は数多くの自衛隊のトラックやグレーザー、その他作業車が群がっていて道路整備等の作業に当たっている。

ほとんど平らなこの一帯が分水嶺上で、よく見なければ何処がそこに当たるのか判然としない。しかしよく見ると微妙な傾斜があり、北側が駅館川、南側が玖珠川に水を分けているのが分かる。

兜山に向かって広がる、広くなだらかな草原の中に荒れた道が登っているが、その右脇に出来ている溝は玖珠川に注ぎ、左に向こうの茅野の中に見られる溝は駅館川に注いでいるのだ。途切れ途切れの荒れた道や草の中をまっすぐに、兜山に向かって緩やかに登っていく。

雨水が洗い流して、露出した土の上にはあちこちに5mm大の鉄の玉が転がっている。米田室長に聴くと昔の砲弾の中身か、あるいは占領中にここを使っていた米軍の砲弾の中身だと考えられるとのことである。目の前に兜山の緩い斜面が迫り、カヤをかき分けながら登っていくとやがて広い車道に出た。その向こうは森林帯である。今日の踏査はここまでで終了とした。

ここは山麓の高台で、道の脇に広場があるが、そこは実弾演習等の時に隊の上層部がそろって演習状況全体を検分する場であるとのことだ。なるほど眺めが良く、遙か遠くに見える黒岳を小さく背後に置いて、広々とした草原が大きく波打つように果てしないほど広がって見える。「あの広大な草原を一日かけて歩いて来たんだ」といばし皆で感慨にひたる。

無線で連絡を受けていた高橋隊員のジープがやってきたので、それに3人の運転手が乗り、駐車場に車を取りに行く。そして帰ってきた車で全員が朝の駐車場へ。これら全て米田室長の手筈通りである。



(写真1) 標高点799mの旧陸軍の構造物の前で



(写真2) 標高点710m付近より弾着地方面